

福為糸抄  
終

5  
2963  
3





たれと孔子も未だ記し説のい興放詩立放  
礼成放學民可使由之不可使知之今之意  
よふ時へ禁中入和音の連音のて理世安んぬの  
はししてふ家殿上のはとちあれ僧家一朝夕を  
暮暮誦のこしく衣冠とあしちれ後とてきて天非  
地祇とやうけじとやまうい和音もあはれも  
大平の徳あれい庶民いあれをそとるに  
おとあへい子爵とてそとるの共牛ありへ  
やしてきて舞のに美とてそとるにひあれ  
行へし由之とて備已以敬とてよ子道の人れ  
信し信ありけりけり大略い先後あり論あり  
民由の章孔子曰と衍文とて由之とい前詩礼

樂ありけりと未だ記し由此理とてつるに何の  
おとあへいや名とてけりけり前詩礼とて  
中以下 遺稿夜話一ある目木曾寺の茶話  
一故為のそと人ありて能借とてそとる何のあはれ  
向むに信談茶話とてそとるありとそとる  
うけのそとる道の徳とていふれし信の寂然  
不動といひ信の寂滅ありとていむい能借の  
名とてそとるあり道と中以下とてそとる  
中以下は風雅と道守の教とてそとるを  
とてそとる阿含一人とてそとるありの内秘外現の  
はありんやゆて孔子のゆとてそとる用  
といひありと下字而上達知我者其天



一、大振のからしむればさきもやうなるかに山葵のからしむ  
 のをうつゝいゝる句をさ南の似而非あはけねし  
 おまの人ありてんのおもふらとほひはく一歌も  
 柔ヤハラカあもを他世と今日の中は作ちるものとまゝに  
 けりて落柿舎の誦中とありて若菜の春  
 録し入しとを

作意 遺稿類説よりを仔細の西林庵よりわたり  
 續猿蓑の撰集ありしに武塔のくくより  
 春句とあらぬを中より其角もこの春ありて  
 秋風辞と裁へる句に中よりそのまゝに  
 いてさふと我も人も感ひてこれのよはに  
 及びきとさなる例のちちるし書し

けりぬ能潜とまげの玉振金取の作とりとちて  
 天下の人と發のさむとささるるみ春の事化と  
 たうとて二作とあらぬの事話とまゝに作  
 けりぬ能潜とまげの事話とまゝに作  
 となること事よ遷化ありし一編やみ春の事と  
 ちとさるるくおくの作とあらぬ

三作 いまもや新眼図のめく衣

三作 懐しの昔のさるやと牡丹

いふ一焦尾ぬきしひ之上時とさ佳おより彼ら  
 春句とあけて曲節の端あり早き竟はさし時  
 まゝに句作の用しる用ととり

雅俗 雅俗よの意の誤あり或は頼政のそは

諄と哀と雅とに趣を侘ありたれとと意の  
雅俗といひ或は肥て累るる一と上篇の  
いづる俗語ありに瘦て清り一けありと雅言  
ありたれと詞の雅俗と二十段の辨とを以て一

傳曰

吾人其語 按るに其語の二十篇一節の  
大よりあるも子細を儒者も併るもあやむら  
一方はよも其ととて一記して是ととて人  
をあり其ととて黄金の用し似て是ととて人  
ととて是ととて人とはととて早きと認る  
認るるといひ也とるに今の其語と吾人  
のありと天地に通る愚人の其語の二カより

えきと天理と人理といふ其の好惡あるあり  
辨しけ二子の大ゆちる録者も其ととて  
辨るも其ととて一とて一とて其のあり  
いふ語の始誅し仲由向日君子禍至不懼福  
至不喜今夫子得位而喜何也云孔子の答  
い今の詞あり卷末の解しるる一とて仲由  
虚言の言ととて顔色の喜怒怒といふ其  
に孔子の削の隠さるる一とて其の  
のふりしるる一と論語の述而の篇に二と子以我為  
隠乎吾無隱乎爾吾無行而不與二三子  
者是丘也云先後抄に二と論語の述而の  
道といふ無隱といふ一とて二高のふら

一子相傳の秘了もあん孔子の道と云うて天  
何と云う隠して一をじりて是丘の詔便と云はれ  
論語の文章と圖の所もあんはる二子  
と云うるおとそと云うる家語の相傳のそく  
を位とわくちむねは無くも位と考てた  
れんかあ一七位の喜怒哀楽も何とて重  
のかりあんなれと海のと認るるそく  
眼擴量直ちりと云はれりて七十二  
和漢の幾方の論語をも論語といはれり  
をく人よむて隠して人あ一親の子  
かろ一子に親のかくもいも子に親の手  
くくたれと云はれりてそくも一  
畢

意と謂ふかろりかくと云はれりてそくあり  
孔子と云はれり陳司敗一向に昭公の  
と云うる一子に親のかくもいも子に親の手  
之をみ希いそくも一子に親のかくもいも子に親の手  
是丘の自慢と云はれりて陽貨の論語  
て女子無十人爲難養也近之則不孫遠之  
則怨と云はれりて女子の例の希  
の意用と云はれりて一子に親のかくもいも子に親の手  
あも孔子の一子の例の希  
朱注の君子之於臣妾慈以去田之則無二  
者慈と云はれりて一子に親のかくもいも子に親の手  
あも孔子の一子の例の希

夫子はねえつらうし暮らぬのへ女子といふく  
不孫ならぬよみと拍のうらたのうらなく  
かひての歎息ある事書ふ事不孫と傳へ  
ねえ播盤之傳のこしく中ひと美盤傳のこく  
終る仰頂傳のこくよ善とさくもた近く  
あつり悪とさくも遠くうむむたこと色歌の  
いやうさうて國雅の傳はたつらひ中ひそは  
はらうれ事人書人もかつらりあつらひのりや  
はらうれ事歌の辨はつらうて女子の詩論と傳  
あつておとつらうと神ふたはうてさう男女の  
天性とさく伝傳のせはよめあつてせはうて  
のあつておとつらうと神ふたはうてさう

の餅とがうて事とよめはつらうてせはうて  
し辨とつらうと神傳の言詠のさるる事あつ  
言行違 批評と遺傳の互秘あつて十論とさ  
せしひはつらうておとつらうと神ふたはうて  
はらうて稿の遺誡とつらうておとつらうて十論と  
傳とつらうて言行の傳とつらうておとつらうて道く  
の建えよ百世の真廢とつらうておとつらうて行と  
つらうておとつらうてつらうてつらうてつらうて  
建えよつらうてつらうてつらうてつらうてつらうて  
のせはうてつらうてつらうてつらうてつらうてつらうて  
つらうてつらうてつらうてつらうてつらうてつらうて



の要は名よきなりて史記の記述の如く懐と失ふ  
世のきりなきなき放逸の人此の終のありさ  
抱くもやもされい公侯より誅罰停止の所  
もあつらひわらふをく誅罰のあけくわらふを  
の兄弟とありて詩の連歌の人くははと誅  
の洞りて下爵の度子よりあされんる利  
よとく遺恨あるらんやはらうて今この世  
以貴玉人とて孔子の文詔と指ははるる儒  
仰の人の賜とらう詩歌の人此勝とくくら  
淮陰侯の勇氣をくも孟之及る厥るの  
なととおまのさ地よりて道くの建さるる徳と  
はくきむくあつらひてあはれなるものなる

抱く天倫の次第ありて詩の連歌とあつらふ  
詩書と詩の論の風論よりなる連歌と詩の  
の優劣ありて詩の能階の手詔ちるる家の  
徳よりなるる言と世の徳誅よりて力のあり  
と忘れされやはらう言りの違ふを伴家より  
力の意の詔ありていふもいふもあつらふ  
はくあつらひてや儒の徳をいふを  
過行つて言のけりけりけりけりけり  
はくあつらひて愚先の徳のいふとあつらひて  
徳文よりいふ言の行のつらふや  
の徳文とあつらひて言のけりけりけりけり  
孔子もけ行とて一はく一はく一はく一はく

與<sup>ヨウ</sup>其<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>孫<sup>ヤラ</sup>也<sup>ハ</sup>寧<sup>ロ</sup>周<sup>ト</sup>と<sup>レ</sup>子<sup>ノ</sup>意<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>傳<sup>ス</sup>下<sup>ノ</sup>亦<sup>ハ</sup>乃<sup>ク</sup>  
言<sup>フ</sup>一<sup>ノ</sup>か<sup>レ</sup>え<sup>ス</sup>あ<sup>リ</sup>く<sup>レ</sup>ん<sup>ク</sup>我<sup>ノ</sup>力<sup>ヲ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>リ</sup>と<sup>モ</sup>あ<sup>リ</sup>と<sup>モ</sup>也<sup>ハ</sup>  
は<sup>ら</sup>く<sup>レ</sup>遺<sup>レ</sup>誠<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>要<sup>ヲ</sup>と<sup>モ</sup>あ<sup>リ</sup>に<sup>テ</sup>子<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>人<sup>ニ</sup>在<sup>ル</sup>る<sup>レ</sup>也<sup>ハ</sup>  
や<sup>ら</sup>と<sup>モ</sup>あ<sup>リ</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>意<sup>ヲ</sup>し<sup>テ</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>レ</sup>力<sup>ヲ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>リ</sup>に<sup>テ</sup>  
と<sup>モ</sup>例<sup>ニ</sup>の<sup>レ</sup>訣<sup>ノ</sup>言<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>微<sup>中</sup>な<sup>リ</sup>一<sup>ノ</sup>前<sup>ノ</sup>は<sup>レ</sup>万<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>肝<sup>ヲ</sup>  
射<sup>ス</sup>と<sup>モ</sup>下<sup>ノ</sup>百<sup>ノ</sup>世<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>虚<sup>誕</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>十<sup>ノ</sup>論<sup>一</sup>部<sup>ノ</sup>  
の<sup>レ</sup>親<sup>切</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>と<sup>モ</sup>信<sup>ト</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>我<sup>ノ</sup>と<sup>モ</sup>  
ま<sup>と</sup>辨<sup>ト</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>と<sup>モ</sup>過<sup>ス</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>我<sup>ノ</sup>と<sup>モ</sup>  
け<sup>レ</sup>辨<sup>ト</sup>と<sup>モ</sup>耻<sup>ト</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>あり

才九段

變化 一子録の變化と天地のを知らずしてを言ひ

い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>と<sup>モ</sup>あ<sup>リ</sup>と<sup>モ</sup>也<sup>ハ</sup>變<sup>ハ</sup>者<sup>ヲ</sup>謂<sup>フ</sup>自<sup>ラ</sup>有<sup>ル</sup>而<sup>シ</sup>無<sup>ク</sup>化<sup>ス</sup>者<sup>ヲ</sup>謂<sup>フ</sup>  
自<sup>ラ</sup>無<sup>ク</sup>而<sup>シ</sup>有<sup>ル</sup>と<sup>モ</sup>也<sup>ハ</sup>海<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>變<sup>化</sup>の<sup>レ</sup>さ<sup>ら</sup>う<sup>と</sup>か<sup>ら</sup>も<sup>レ</sup>迅<sup>雷</sup>  
疾<sup>ク</sup>凡<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>レ</sup>時<sup>ヲ</sup>と<sup>モ</sup>人<sup>ノ</sup>君<sup>子</sup>も<sup>レ</sup>射<sup>ト</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>て<sup>レ</sup>  
神<sup>ヲ</sup>や<sup>レ</sup>仰<sup>テ</sup>と<sup>モ</sup>敬<sup>ス</sup>る<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>リ</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>天地<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>變<sup>化</sup>  
ら<sup>り</sup>今<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>向<sup>テ</sup>に<sup>テ</sup>變<sup>化</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>變<sup>化</sup>  
と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>驚<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>驚<sup>ク</sup>の<sup>レ</sup>也<sup>ハ</sup>  
と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>也<sup>ハ</sup>  
定<sup>ニ</sup>趣<sup>ク</sup>向<sup>ク</sup>法<sup>ヲ</sup> 白<sup>馬</sup>條<sup>目</sup>の<sup>レ</sup>所<sup>ニ</sup>在<sup>ル</sup>と<sup>モ</sup>執<sup>中</sup>法<sup>ト</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>  
書<sup>ヲ</sup>強<sup>ク</sup>執<sup>ス</sup>厥<sup>中</sup>の<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>儒<sup>書</sup>と<sup>モ</sup>仰<sup>テ</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>也<sup>ハ</sup>  
也<sup>ハ</sup>書<sup>ヲ</sup>會<sup>シ</sup>て<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>向<sup>テ</sup>の<sup>レ</sup>也<sup>ハ</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>也<sup>ハ</sup>  
中<sup>ノ</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>と<sup>モ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>し</sup>り<sup>し</sup>也<sup>ハ</sup>

そららてふない近く人やとまぬあり中を也終る  
の又よきし巻巖強と中よりりて所食は巻と  
ふねよとそららてふないや源氏の事帖し復た巻  
と中よりりて桐壺雲隈とあねよはらるる後  
題向を定よりて句作を後ちるるとある一とを  
減し今の能潜所り題向と句作よはらるとを  
中ゆてふ句の事といふ句の用とよき差ふ  
ありて畢竟とるを理窟とよの記をたれ  
孩よ水沖の命とてあねよ喜よとらりてむらり  
かき一自己の境林の境あふらりと世向のくは  
而るうりて而るうらねとて遺稿の語  
よしけよあむむうな巻よ供よれて河の新時

とらあてて爾お終るのあへて巻はらるる  
よ人く事ありとておその句作よらやとて  
の守らとてらにたかこの巻の巻はらるる  
のたらとておたれとておたれとておたれ  
論語の多識とてらにたかこの巻の巻はらるる  
又とてら一子路よん文とてらむ教誡の二用  
もその巻の巻をたれとてらむらやとてら  
のたらとておたれとてらむらやとてら  
終るの時よけ附とてらむらやとてら  
とてらむらやとてらむらやとてら  
やとてらむらやとてらむらやとてら  
あつゆらあねの附とてらむらやとてら

ありにこそしてのらそのしとりになるのそが  
と既述ありてそのしとりになるのそが  
所念とすあつたれその事とてくうより  
それと隨類得解といひて後縁の時ちりぬ  
決してあつたれその事とてくうより  
とけりてそのしとりになるのそが  
悟易迷難とてそのしとりになるのそが  
附在りや所村とてそのしとりになるのそが  
とてそのしとりになるのそが  
やなるのそがそのしとりになるのそが  
てそのしとりになるのそが  
とけりてそのしとりになるのそが

と耻下と我をれらてそのしとりになるのそが  
五老井にあつたれそのしとりになるのそが  
かたれりてそのしとりになるのそが  
はれらてそのしとりになるのそが  
みえりてそのしとりになるのそが  
とてそのしとりになるのそが  
りてそのしとりになるのそが  
差ふとてそのしとりになるのそが  
即家の縁のかつたれそのしとりになるのそが  
いつてそのしとりになるのそが  
澤とてそのしとりになるのそが  
のしとりになるのそが



伽譜之連歌 け端書とちけりあれし物事の  
 亦ふし何故あり 源流は世に様用の用不用い美末  
 の解しつるへさむとらんとまほき事とて連歌  
 五照の法はあらん或は連歌之能譜と云ふ或は  
 能譜とて連歌をいひてはさし漢和の文あり  
 ことく連歌の世なるある一まよ一まよの格と  
 連歌の対と連歌よりさういひ能連の対と能譜と  
 ちくまよと和漢文撰とけりあり  
 撰 撰 撰とて撰撰ありけり詞の禪録とあり  
 とありん此中ふとりの 吾輩の理と知減とるの  
 といへ世に能譜とさる人し今うし所合の微細ちり  
 とすてし男いけ女しんとてて撰撰とて物

唯心の所造よりて朽も見難入るるあむむ  
 ちりちり秋のちかくさのく人し合とありあむむ  
 念んを胸に我れあくふ向の眼の眼の海  
 てし男もけ女も人物のくあし衣袋の撰撰  
 もんありせきれ所合の起向とふいふ向の中  
 ちあつりく句作とふの用とてその約は約  
 一字も一語もわよあるよりあけけりよ身化論  
 いかるふのこ字に結文とけりて眼の眼のさし  
 つけはある巻のけ文とて被と起とけりけり  
 ありけ向と撰とめ物とけりけりけり所句も  
 ある一はけし微細し平懐の筆と撰とて人  
 の縁にありけりけりけりけりけりけり







層く二層のふりどかきいひもいひの真如  
もあふりしむは遊の故のほはあれど  
よに條のれと言はれど又刑のやと罪ゆ  
ありけおいぬく物子庵よとて百世の  
一人の遺誡きんを洋にけ後誡の属言と  
ありて聲ある所合の中用あれ枚子とを親  
のちいふもあはれあふらよ一はのちと  
て他人の他福と自己の他用とに我師の理福  
と臨仲とむむとや親善の眼力もあはれ  
**發句信** 我師の常談よぬ向のよへ物もあはれ  
所向の變化よ自在ちりしぬ善の在せよ十信あ  
むちりし下のみもくも古来の捨よと

て誹諧の理の層らさくもあはれ今ふりれ  
年とこあの上の人もせりもあはれ  
者自のうらぬ善の在せよ信てよめく大  
情と失つりもあはれぬ善の在せよ鏡形  
あふりし上もそのもあはれぬ信てよ毎の  
ちを善達しりも今の變化の良やうあはれあり  
まし他世の時世難ちるとまふりし善の在せよ  
若ともあはれぬ所向の鏡形もあはれぬ信てよ  
月重もあはれぬ調の良もあはれぬ信てよ  
今世もあはれぬ今世の眼界もあはれぬ  
今の世もあはれぬ今世の眼界もあはれぬ  
今世の世もあはれぬ今世の眼界もあはれぬ

あはれぬ

あはれぬ

とあり神事の同とぬる中言る藤の書物よ  
おちくるはの神の身りさぬのこむよりい  
けり上子の者句の邪にありてさす  
そと今の波ちさくもかきも人のせうとされ  
詞のゆ膚とらぬのち上子の細く論はさ  
れよく者句のさすれとけりさるるの書  
あねいさるは只推の書とありてのせよ者句の  
馬下とさるものけりさるは子書方化  
の居とありて物さるるの居とありてさるる  
けりさるるあつと者句の七所句の上の子ありて  
あつとけりさるる有るの居とありて居自然  
の位ありてさるると天の取事とありてさるる

けりさるるのよありて七十二才のちけりさるる  
と我族<sup>イ</sup>辞命<sup>ニ</sup>則不能<sup>ス</sup>とありてさるるの居とありて  
のちけりさるるけりさるるとありてさるるの居とありて  
一とありてさるるありてさるるの居とありてさるる  
くありてさるるありて我と耻とありてさるるの居とありて  
我とありてさるる道とありてさるるの信ありてさるるの居とありて  
とありてさるる訓ありてさるるの居とありてさるるの居とありて  
ありてさるる猿の書とありてさるるの月其角  
壇<sup>イ</sup>訓の書とありてさるるの居とありてさるるの居とありて  
ありてさるる猿の書とありてさるるの居とありてさるるの居とありて  
さるるの居とありてさるるの居とありてさるるの居とありて  
の月とありてさるるの居とありてさるるの居とありてさるるの居とありて

ちねい人とおぼやうきと云ふ句にちねい地帯の境  
 廻り地帯のこころに地帯と云ふ人の子と云ふ  
 も三層のこころにちねいと云ふ人の子と云ふ  
 及びちねい下の又云ふ人の子と云ふ人の子  
 のこころにちねいと云ふ人の子と云ふ人の子  
 と信じて一いふ人の子と云ふ人の子と云ふ  
 業くまこと事あるも一いふ人の子と云ふ人の子  
 さいふ本具の業と云ふ人の子と云ふ人の子  
 一甚深微妙の縁入と云ふ人の子と云ふ人の子  
 を射しゆく人の子と云ふ人の子と云ふ人の子  
 于まらざる人の子と云ふ人の子と云ふ人の子  
 の作らざる人の子と云ふ人の子と云ふ人の子

善く習ひて一いふ人の子と云ふ人の子  
 さいと云ふ人の子と云ふ人の子  
 一道理達之のえ祖ありて人の子と云ふ人の子  
 るもちねいと云ふ人の子と云ふ人の子  
 歳且一いふ人の子と云ふ人の子  
 の利ある下に云ふ人の子と云ふ人の子  
 中念趣向 接まらばけけと云ふ人の子と云ふ人の子  
 が減ありて一いふ人の子と云ふ人の子  
 いふ人の子と云ふ人の子と云ふ人の子  
 いかん一いふ人の子と云ふ人の子  
 人の向も七層八層の心と云ふ人の子と云ふ人の子  
 いかん一いふ人の子と云ふ人の子



勤破りてゆきの勢向よきふらうらうらふ  
分ふの園と透ねまき

一を調子 持まらに天地の運行より人の力帯の  
浮沈も六属ららりて世の上も下もいさか  
いおの振子あね附向も二つの運連とんを  
一に流るるらちるれりともあねらち場の人を  
あつむりまらるとし 祀るる寶けしよか  
りー連行の後係りしものありちるれ能活の  
向し附向も二つの調子とんをまき一に油のちよれ  
まついちまらららる向も耳に徹せりこれく  
系のちりあふも一に穀とん棧指のまき

傳曰

東西二名 持まらに世段と張子尊う文論よりて

始終の用よりあまらいゆれい風雅の始終の二と  
りりかの文教の用あねいとえ祿中の軒福より  
けしもの以書ありちりて福の大略うん先師の  
新鑄右文は事とありて張子尊うけ銘の道  
始中終のことゆりて西よの乾坤の二體とまら  
東よの獻言獻動といやむまらあつい心性の  
ゆれのまらて風雅の文といひかていられ  
崇依う子と文といやち禹王の存とてあつて  
父のまといひ昔酒の二まといやうの可利の  
用あねらあり曾參も存の内もあねい掃全  
者曾參也頃令者伯奇也とおあり 振子は

ら

十

拍

書一とこれ子の詞の親切とやうな、  
つらと文のよ名はありその二は備りしに  
一子も古文の判りあらうしそをあらわすの  
おとなく文教の用りて文より可の用とれ  
さあり文節の備を新鶴集より  
子、姿、  
カコ妻のこよとらまてカの拍子のみとら  
あへ口の拍子よ人々やけ妻の拍子よ天運  
とまらうねも動静の二よありてまゆくの拍子  
いまりやましく静りおの拍子いまりか  
能の拍子よ才よ言法の備あらわ詞の拍子  
よかるけいあもあまをまらけ拍いあま固風

翁句より翁句まら一子一言も姿あり  
酒食の雑話より連音の種ありまをこ  
一とを伊勢の神以能より正猿といふ集に  
草の百韻の曲の節よりそらへ焼餅の二つより  
こころのこ子向あり楽巻と例の作あらわ  
まを帯はく一の拍子よまをこ一おのれ作  
筆いを帯と階くらにたれや例の姿あり  
いむし愛より茶をの場とあらわ馬士の姿  
とあまをたれとらのまら巴のまらあま  
詞のあまよあまあらわまのあま  
とらへあまあらわ舞のあま  
らねけ句のまらあま舞のこまら

とも馬はの二子のうつらねのそと宿のあやぶ  
 ありこねるを積功累徳といひて誦の旨を中  
 了しそのの旨をたゞさる一――折子とけ二句と  
 鑑して折のまふおとさる一――と我は海は深  
 い折子利よく天下の日月と知とぬりせし  
 七はもさるしう有るは風ひけのちまのさるは  
 香葉集教といひさる一――檀林の折といひて  
 百さる一先といひあゝ折さるい例のまふた  
 らん折のの憂る右のまふたはくちむ一――  
 等類沙汰 辨云一――と也却の金塚よく世の  
 折かさるしうに連音さる人もたさるしうとわ  
 けしも唯徳院の御制表しあつる海川まらぬ水

い折さるまらもさるてありの字のまら  
 あらう一――に心敬の連音の音向し一――水さる  
 清くまらりのまらるるしうらあはるしうま  
 等類とのまらるしう折むと情ありまら  
 次ありしうあをばはよあはるしうれかまら  
 等類の折あはるしうれさるまらまらむしあ  
 まらるしうあまらるの折らるる書書頭とすお  
 今川入るの疑ちるしうらあはるしう  
 其世の折さるしうさるあり  
 故る古歌 進行類説よな音の音向し折句  
 もも古詩と音と裁入るしうあはるしうあはる  
 あれし音とまらるしうまらるしうあはるしう

とつから一向もあ一當時の博學の作を連と  
 世界の人のあふぬよき一とては事と人よあわれ  
 むくといふりりんのほのほやあり竹なほの  
 おころけけちと白中文化集とさくをさる  
 い病螫とさるけ詞のありりさる

言や弁の子あはをと  
 ちとあや替ららふ幸の畑

かくけ二句とさるけ一さるけ首節とい  
 て老あのみ事れもいづくおれん替は  
 熟語とあふぬくんのさといとをさる  
 さるけとさるけさるけと入てさるけ詞さ  
 さるけとさるけさるけとさるけさるけ

泊船は事入らり一今よさる集とくさる  
 いさるの簾宵あをれいさけもあ  
 二道とあはさるもちさるも及や  
 と裁入の鑑とさる

論語詩經 け段と巻末も身歎の下は  
 され論語の田在文とさるさる言さ  
 先後抄の全文とさるりさるさる段と六  
 言と興觀群怨とのさるさるさるさ  
 朱注とさる見とさる

○子曰由也女聞六言六蔽矣乎對曰  
 未也

抄云此章廢續前一佛胎而有所見一章之文勢  
 了共就夫而之教誠世則作別章廢文之一法也



居吾語女好仁不好學其蔽也愚好知  
不好學其蔽也蕩好信不好學其蔽也  
賊抄云仁知信之三言者儒書云佛經云  
教誡之常也則不及例之為誡季狄  
好直不好學其蔽也絞好勇不好學其  
蔽也亂好剛不好學其蔽也狂抄云直勇  
剛之三字  
者此章之要文也左有者六所有好學之二字而可見  
子路一人之誠厚諸註者先仁知信而後直勇剛了則  
昨日之子游麼今日之子路麼成不替寺之談美  
而何以可分儒仁氣矣此等可知論語之先後也  
小子何莫學夫詩抄云此限有全續前章而尤  
之二字者及行次平乎小子者指子路詞而亦語余  
麼如小子莫之言則親切之平語也季然則從公山弗擾  
至此章適者下同一論之文勢也

詩可以興○朱曰感發志氣興也抄云朱註者非詩經之  
之法談云天與興者詩之比也詩者從志之所而可乘興而  
遊興也其詩者朱氏麼為註止乎五志六義之賦比興或  
可觀○朱曰考見得失抄云朱註非詩經之用謂塵劫  
在花草彙而可觀念也季之變感懷万物之化與所朱氏  
者自以觀感之三字今註論語之政刑止乎今惟為忘哉如何  
感者不察其人之用字  
面之註者與者此謂也  
可以群○朱曰和而不流抄云和而與者詩經之註也不流  
與者朱氏之依言也是以所謂註者之塩梅了矣  
群與者万物之和同而可知凡雅之不隔貴賤止儒內者以之  
可實仁居武亦存者以之曰文和歷文和者必為子路之用厚  
詳者有認實字之名而多麼以知  
信設詩經則世云抄子之定規也季  
可以死○朱曰然而不怒抄云朱註麼至此段之不怒而見事  
今出安字之尾矣非例之曰蓋梅取是者謂居詩經  
直論語者也孰能有不怒之意耶這以麼可悔者本朝流布  
之論語而朱喜集註之無以雅也季然與者詞之哀動也抑曰

凡雅之大事乃者起詩麼以一言實爲之與哉此歌麻以一首漢  
無遺方然情了則天地麼動之鬼神麼之增而神佛之  
正直也了數不成焉之二果何麼然則不憐給正耶焉書  
于傳中物然止麼不所謂今之哀動耶是以詩麼歌麼知可  
以然道理了哉在則于孟子今麼有北意而所謂舜者注天  
然之矣了則未註者何之不知然之矣則然之矣親與者  
身自他然與之矣止半又焉今名無尤樣之漸變唯然者  
其親之意也然之一字者在孰國而麼焉覺爲居事也  
名免今麼角今麼虛實之不自在也乎初謂地假之乎  
竟之者何與之遊者詩學之常而所教乃人修目也則子路  
名者教之觀然之矣而所和給武士之心可案其目其人之  
用詩者好顯孔子之筆刪而將仰以雅之大理麼是也  
通之事又士遠之事君  
○朱曰人倫之道詩無不備二  
例之不及言其筆重之二字有在麼有在也言此段之用則  
通遠之二字有無用之用而論語者將註文於先社可謂  
論語之註者自中了在共兩處知有之子不通漢  
語程者分明難言假令言其推量之沙法也乎  
多識於鳥獸草木之名  
○朱曰其緒餘又足矣  
○朱曰其緒餘又足矣

註之先後乎詩者才一覽花鳥之名而樂而可觀哀而  
可然厚學之士者所覺道之猶餘也正或時者勸曾子有  
子而宜結首階則學士古此時者像子路一人而行之交  
麼巍兀也則宜結先覺花鳥之名次作詩書文博好學向歷  
况見家語之好生了則并詩雅之肉雅與鹿鳴而若以鳥獸  
之名強之固不可行與者有加朱公安字者而破詩之優  
游故小言當道遊道結此誠居矣何雅者格物之本而此魚者致  
知之末也則于月于雪于花于鳥不家四季之優情猿哉豈知  
今日之孔子多矣知今日之子路則今日調論語之註者哉矣  
論語者可不視之觀之安而之矣耶蓋多字者丘大自之  
義而或謂適也  
之訓也  
○朱曰其緒餘又足矣

第十段

聖典旋 子孟子曰舜由仁義行非行仁義之大道  
以仁行仁之義也

○朱曰其緒餘又足矣

○朱曰其緒餘又足矣

てともんと仁美としれおもしろくにきき齊いさうと  
とちりて代とかきあふふあむははむあ人そ  
りありけ執れ先後おし由と行の差ああるはれ  
おの下に全文とくらう一まるん末の世れ政の上  
の費と下にはくあひ下と一金の賂とくあ金の  
上とあむあむとくあむい民といをれとを子  
いひくうた大道廢有に美といさうあむく  
なり頭今と目しきく一くも耳しあむく  
ぬうく一ゆい儒宗のにんとあむあむ武の  
厲言とあむあむ天下のきあふ民とあむあむ  
かく横同し西といはくく民といさうと一ゆり  
あむいけあふ孔子の又刑解一繩之以刑是謂為

民設<sup>レ</sup>刑<sup>ト</sup>而<sup>レ</sup>陷<sup>レ</sup>之<sup>ト</sup>とて今とくさく鄭の子を  
寛政極政のま言ふらむきうのむあむ一  
されし能階の世代なる然あの中れ節とされと  
せくといふるの方ん一まといとあむいへく一も代れ  
物んといくやとあむい當射よふあるあ近達し  
を代のけ式のとて世界の能階とてあむあむ一  
代式のる代とあむい其意地きていし論あり一  
今覚古明 按まりたけ殿といはくたちをといき  
くろ不あり今覚とあむい一も辨一やとく大明  
いさく一辨一か一はれ一文も通のくしと事あ  
一理とあむ射と一切物とてい論いさあむい古聖あ  
いさくあむい神考の頭とく一もあむい一物

一物

一物



とつらも五運變化のるにあらはれ之即一なり  
兼向しやまらねたらと兼しとて韻字傳格と物  
の字も世とや韻字傳とていれありるなり  
と兼向しとていれあり

私云え福中の軒宿る才之のよ名はりとい  
下に四句月の軒をい何故よとてよ十て子の  
係ちあり例のちてけられられけりといの板  
ちさや梅とるん起を轉合と兼向の新式  
あゝねと何故よとていれい合字の板  
及へられ例の法およまありといと兼向の  
いりといりちらとや竊し白馬の大略と辨と  
い四句月のと兼向云文敷とことりて一万物と

とて比敷をいといて和合と四句月の初の  
成るありていといいおわれ格とて調と格と  
の字もいといやいりといと比の式とてい  
起を轉合といい音とて連席と曲流とい  
能階の式同といいありいれいりて兼向の  
いれいりといといいといいとい一條とる辨の  
後勸しとていとい

▲哉のり来のり梅とらたけと子の大和詞と字訓  
あり哉のり多用あり稱歎の二美と西字あり  
稱と歎とに差ふあれ余韻傳詠と詠とい通  
用あり見永口傳和号の詠吟も礼讚のありぬも  
永言の意ありといと兼向の来のり従来の意ありて

一万葉のあざむくあり和訓の通里名之美の條のす  
 條云倭の條あり倭の牡丹あり花と二葉の  
 ちさけあざむくとささる花の條ありあざむくを  
 橘よけむらもあざむく花座傳 ねぬ古式と  
 花の條の附方あり人の差ふとささる論れ  
 い好するの條はや秘をささるもあざむく  
 ▲花のすの條云古式より八葉の花あり花のす  
 いさく一葉ありきさく花火餅花のおもりの  
 香にむらむらさきまよある一はれとささる  
 十葉のすありささく油色傳 括およ  
 あざむくささる比魚傳 ささる竹のささ  
 けささるささるのささるささるはれとさ

けの花のすのささると物倒のあつういあねん古式の  
 説もささるあねんささる ▲指合去嫌のすの條云  
 指合ささるは名はのりあり沿路の指子の  
 ささる去嫌といあら象物のおく竹本鳥獸の  
 ちさかん一巻の舞のあまねんささる古式  
 ささる論をささるささるささる自縛のあや  
 ちりあり一はれ ▲花八月のすの條云花の  
 香にささる一月八月の配も月花と風雅のれ  
 亦あれ又節の配をささるささるささるささる  
 とささる新とささるささるささるささるささる  
 くい月花のあつういあねんささる  
 持さるけ一説と白馬のすのすのすより自ささる式

花のす

七五

の大しねちちらう或は玄妙切といひ或は天まうりといふ  
おの神々めりいもふたあり一傳 或は句の切もかま  
るも古式い十二この名自あれ一神家の後よの  
字も一かきり一傳 かまめりこ一かきり一傳 漢一  
哉と哉とい通用うて行歎と二美とくる行  
哉字一ニ名又用うて一傳 畢竟の咏嘆の集韻と  
ちる一或は之段切も一子切も古抄の注はみと  
らぬがう一傳 或は雜の者句といひ或はせまの格  
といひ一傳 或は季の格といふと自字のほれ新  
格うて一傳 東老式い注文ありけのい季の  
遠見より月花のあつひら句漏うておろそ  
余條の設あれといふ中一論の畢竟と千式

いし中のらうととていひ一傳 或は一あきしつあき  
い言供とていひ一傳 所近うい何しとていひ  
やと子の自名あきとていひ 他や知新のことといひ  
知妻の用いあきとていひ 或はおのあき  
般捷好事 史索隱詞般捷之妻字不史詞  
猪先生詞好事者讀之以游心駭耳 史記  
ういなるの舞詞あり 或は一く人の用い  
言語形容 按るるんを改し物の中ありい詞の  
やうとる二子の差ありあきとていひ 今形容  
へ御のらういありあり一傳 或は常訣もい言  
の記とけう一ていひ 或はとけうのいけな  
く御説も文章のいけとていひ 子とていひ

物の形容と庖丁の殿とやその詞の形容と  
之類の論とありて我々の詩の文論と  
見ると一は此の人の席とてお向の俯仰起す  
論と申に入れたる揚子のまゝに強しと  
一人の附合ありてあれはさうゆゑのま  
す一はそれゆゑにやむらうを揚子の  
世なりとておむらうを世の世なりと  
遊すとおむらうを世の世なりと  
たその行よりて戸懸とてそそ積りありて  
あつてその形容とて詩とてその腰の珊瑚  
舞とて一とてその世の世なりと甲とて  
減と論説とてその論説とてその傾城宮

万は七一現あれはさうとてあれと

返心 白馬教誨訓は我家の大事なり世法は返心の  
ニ子あるとてさうとて一はそれと儒者の遠き  
といひ仲孫の棧婦といひ世法といひ合路といひ  
きといひ儒法の大事とてその世の世なりと  
世法の世なりとてその世の世なりと  
むらうとて和漢の博字なり返心のニ子とて  
さや世の世なりとてその世の世なりと  
書とてさうとてさうとてさうとて  
さうと博くさうとてさうとて  
字ありて一はそれと論説といひ思則  
思而不學則殆とてその世の世なりと

心法

七





ちるも世に對する人のそれさうしてこゝにち  
不あさくはせられたる人の世にあらん人の心は遠れ  
てなほ一ありの心をたもてくるべし人の心は  
くもはらまざるもあつてもいふ根のあらぬある目  
へ額を執とあつてけりたあつてつと心馴らぬ  
例のやせたるに馴らぬ人らあつてもあり果は世の  
人はあつて人莫不飲食也解能知味とつる  
飯袋子の漢といふは男ありたれと定法といふ庸人  
と云はげく心不存慎終之規口不吐訓格之言  
見十圍大而不知所務從物如流不知其所  
執といふは人ら知憲のやまればおきて世の  
名もといふと頼人といふて子文といふていふ百も

てはつて連能の向上といふての遊藝といふていふ  
てはつて其志書を益し若用あれし世界の用もまむ  
とまはる商人といふ例の大およそつて奉りつて  
例の所務とまむと醫者といふ例の所執とまむと  
たまむと世にありつていふ例の如法といふて一物  
の和南といふむといふていふと世の倫といふと  
とまはる商人の月初のといふて馬に不謀手交は  
不信手傳不習手といふ男あつていふ人の世に  
こころといふといふと離事といふといふと目と  
はつていふといふ能信の家は眼目通といふ及らんとて  
世にありつていふ博学の都といふといふていふて  
世にありつていふ博学のまをといふ博学のま

博学のま

博学

多文としきりのあつて世にの日用の可とほして中庸  
よりる教も奉り知る何のあつてしるものとらふ  
儒術の連絶しはしきし自己とあらふしるもの  
此費 持するにけしきと全書の用とつてしる  
の費とつてあらふあつて白馬しるものつとらふ  
あつてあらふと書はるる字のあつてしるもの  
誹諧の歳目しるて天也。地と所相の用  
事しつてあらふあらふの神又あらふしるもの  
十八の切字とあらふと世の。にたつての切字  
知るはしきあらふ切字とつてしるもの何のあつて  
つたつとつて天長地久の熟語とつてしる中  
と切らつと不祝美あらふしるもの切字とつてしる

本に鶴鳴ちる堀のあつて子田井のあつてあら  
かゝらつてあらふ切字とつてしるもの何のあつて  
の切字とつてあらふと世の。にたつての切字  
駒子の傳授とつてあらふと世の。にたつての切字  
字するものあらふとつてしるもの何のあつて  
宗近 建邦の所説とつてあらふと世の。にたつての切字  
きしきとつてあらふと世の。にたつての切字  
宙のあつてあらふと世の。にたつての切字  
つてあらふと世の。にたつての切字  
一河とつてあらふと世の。にたつての切字  
の十折也とつてあらふと世の。にたつての切字  
の被美とつてあらふと世の。にたつての切字

の被美とつてあらふと世の。にたつての切字

の被美とつてあらふと世の。にたつての切字

とありし或と民間の俗語とありしに五人傳ひ  
も及びる上はあれども減なりと近のるは  
かゝるものと彼より一藝の上はあれども  
哲の能とありし年も及ぶしとち能く子夏  
いかに類回信而不能及子貢敏而不能識子  
路勇而不能怯子張在而不能同兼四子有  
之有以同夫吾弗與也此其所以事吾而弗載  
也夫大哉夫子夏の宗近くる情く子夏しむる  
一節の如く一藝とありしとあるは高の如  
いかに辨の同とあるは子夏のを録の  
やうにとありし筆の代は子夏の持のよる

賢のりわし母有るは專のけいといふとありしり  
は一多の藝の可申とありし一節の二節の如く  
ありきといふは皆しそとありしはありしは  
よのありしと一たの宗近しありし一とあり  
ありしと宗近の二子の辨録ありしとありし  
一宗の和尙とありし詞あり  
例、一節一節とありし論の書法より一和對より  
節ありしとありし一道の二とありしとありし  
るのありしとありしとありしとありしとありし  
偏擔とありしとありしとありしとありしとありし  
論語よりとありしとありしとありしとありしとありし  
宗之次とありしとありしとありしとありしとありし

宗之次

七

教化秘す 白馬教誡訓よたしく儒佛の教と  
了ん内秘外理の二相ありて新出孔子も虚  
言をた知あうたれは虚言にてとんと實あり  
つたのそ地と説のふいす今と言語の類い  
てたれを言ふといふふいおまはまはく  
はよ虚ても實てもあうらうたれと悟り我  
はるるうあうらうらう儒佛の一方を人と作ら  
ざるあるあま人と迷をてるあれやと業の  
明眩さうらうられし新出孔子の智性あれ  
すんもも囁く信ふとたささう子疑一決の府  
あうしあうた教化の秘するあうくす人のあう  
ありく教のうと實通せうあうんあうらう人の

あうしあうたあうらうと大悟とい悟はあ  
と放下とまう一例とまあのおうい一例の  
とあうらう一とあうらうも大悟の常禪所とらう  
即ん即佛の言下にあうらうて非心非佛の釣語  
まうらうて這老漢或人未有了目とて我佛  
の馬祖と老毫とのうらう即んもあう非心  
あうと虚ても實てもあうらうとて馬祖の内  
心と看破さうあうらう佛道もはまう此の眼  
あれは梅子熟さうらうとあうらうらうあうけ辨  
の能潜一入のそ地うてはう連歌の風流い  
月ようをあう花うらうらうらうと竹庵傳  
ときうらう三十捧のほはうらうらう

白馬教

九



今更に十町と云ふ所の世のまを  
 草屋業にすまやりの神像  
 源云とて伊賀伊勢の降思ありて海へ尾  
 城の風ふあまり才一の座を電と句なり神心  
 のふあれつてつてふか草あん才二の十町と  
 なる草のこは中より上なる上より下なる  
 人と知らるる神像をやいしとるん才一の神像  
 へ作者の熱ささけけらかくされたる人  
 の句にありて草屋業のありし人の乃なるふ  
 ありしつたにたその人への句はあつてはつて神像  
 のふまわれらばあつて作者のふとさめ  
 たららにかくりあめあれらつてつてある後

の又されと新しつたつて神心のあつてまを  
 歳とて草屋業のありし人の乃なるふとら  
 つて陳云新なる不洋よりつて句は花柑子の  
 奇つてさうくつての神像と神心とつては  
 とまをとて草屋業のまありし書通の神像と  
 つてつて例のまをと神心とつては神心と  
 つて句はあり風雅と神像のまをとつては  
 とつてつてあつてつてつてつてつてつて  
 あつてつてあつてつてつてつてつてつて  
 神像の神心とつてつてつてつてつてつて  
 指合去嫌 神心とつてつてつてつてつて  
 とつてつてつてつてつてつてつてつて

負字式の如くはとあげてひきくに新いの差  
 不と辨とて去種とて子象物のれうて竹本  
 もる歎いつたうなうて天賦食服のれうて  
 くの辨用の差あり支射とて詞の辨あり  
 或と名取物各と同字別吟の取はるべき  
 準法の二より転向と句作との差ふとつけ用  
 と不用とのる段とらぐ一四式のさく文字と  
 とふむへうとてきとて一梅様と柳腰のさく  
 の牛の心のは馬のこもて居所と筆の字名  
 のさくともさくとい打紙もも人よりうさ句  
 一用控さく一なれと句とてさくともさく  
 せんととさくとの差ふとい也詞の牛の目と

とも心の鹿馬とてるのさくともさくとも格別  
 へん転向とい用ありと句作とい用ありと  
 さくとも一指さくともさくとも同字とてれ  
 してさくともとの法得といさくともさくとも  
 ありあり数字も送字も四式より轉一さくとも  
 一五並一山ひく山のこもて沿路の拍子の目と  
 へ二句とてさくともさくともさくとも各所も  
 物名も録廉一廉のこもて屏風と松風のこも  
 偏うさくとも字形とてへ真名も假名も差ふ  
 あくへ附向も打紙も用控の誤ありはれと松も  
 しひくとも假名もやうけつてさくともさくとも  
 こもひともさくとも假名もかかれとい海あり



ことおくと同字より同意の誤りて松風は松風  
 のこととて四式より同字別ありはれはあり  
 と假名よがらと批子のたてききとありあり  
 畢竟とて式めるとたてききとあり一巻の書は  
 あり諸路の拍子とあり針と指合と書は  
 して新川のたてききとありとてききとあり  
 あるはたてきき論との眼の所とありとてききと  
 ありとてききとありとてききとありとてききと  
 ありとてききとありとてききとありとてききと  
 ありとてききとありとてききとありとてききと

二見文世玉圖

鏡板

長一尺九寸五分  
 横一尺一寸  
 厚四方又重

小口埋木九寸形ニ  
 但ヒラ共ニ九寸ニ

板足

高一尺五分  
 横一尺五分  
 厚四方又重

小口埋木前ニ同シ  
 小口ヨリニ方

足、ひき通

横一尺五分  
 長八寸五分

足、はきき

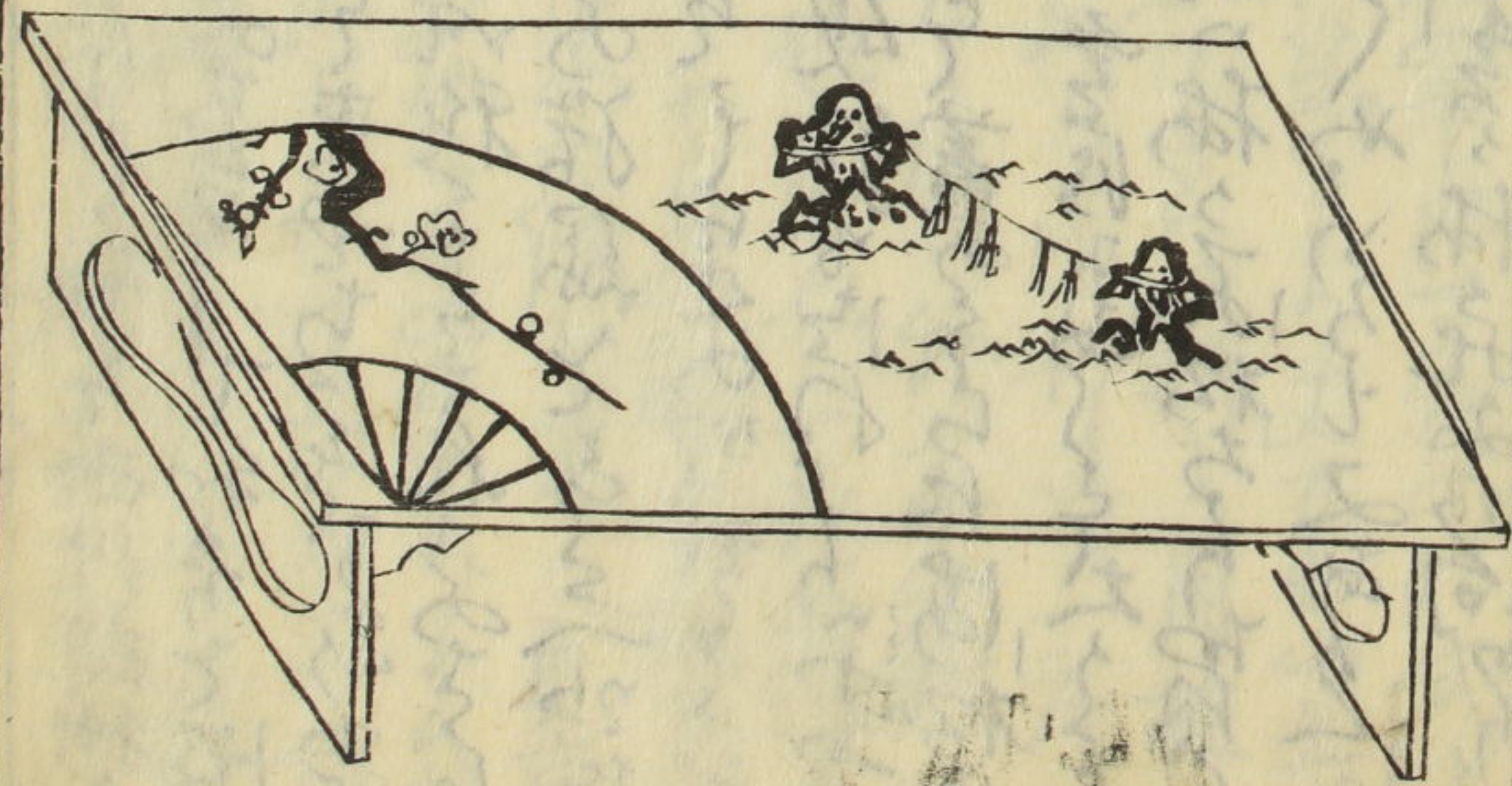
横一尺五分  
 長八寸五分

足、海鼠

中程 あり  
 跡先一尺五分

足、

埋木タ重ニ中ニ方ヨリ  
 小口埋木下ニ方ヨリ  
 フケケワケケ跡先ニ方  
 中ハ鏡板ナニ方ヨリ



け圖りと世雀家の抄書きちりりもね片西行談抄上  
 二人の浦上位のみり比麻と文かまう下和音と協  
 子の語のういせしつくちくあむと来世ちつをいありと  
 子又とにすまもみあるより以抄うとこれいあまひ  
 とくまもむたあういたれいの括縁とまうくかた  
 けく形形の用いともあれし是のかがりくを  
 了すうといふらん地より一破宛もはのりいあり  
 りよの宛々えぬとがらうしとて蓋めうらたは松と  
 結ととかけりられと改新い言はふあくとたうとら  
 あるうやうきと一扇の指い梅うの松ちりあやう  
 本他うつ言辨あれいあさくわあらし又あう  
 中比より足作のうらまあひもまう梅はあ向あり

諸抄法式

貞古式式の五條の下に二條のは式と  
 了るより才一と連えぬ和節より又其の上此  
 設あり一巻のは式といふより口折し月花の  
 控より指合去嫌の設ありはれし一巻の  
 比式いあむむねの抄よかりねい新家の新式  
 といふはれし一巻とあれと也まねに二條の役い  
 字道の習性ちりりな字よりその調子の概子の  
 りありしよれいまに概子の一條と奉り貞古  
 式の大むねと辨とい條も概子の連えらう向  
 とうげりりけりら作者のよとさけて附向うう向  
 ところのお向とい奉り一作者らといありの程と  
 中より中音に附向とい子向し概子のうあ近

いまていそきたりて一はて家近のむじへて今  
まゝあしあしちりたの向とみ一筆一  
或ら又一とある中一むじそくらの附向と筆  
てたのち懐帝に安と一遠近とくなく  
ゆまゝあるちり安と一ねとお向と附向と二向  
一ひそと一彦中一打越とまゝあるちりありし  
純子の向とみそりに上向いありし息とはあり七  
りありしとほけて一む一正向い七の一はに  
より切り一向護のとつらひひくすの剛一咏嘆  
意ありと我はれぬ又條のらぬとみそく一ありし  
代式あれし純子のけのちりより言ふはけ  
一條と辨とを余に漏中一教在とら

と石 拙よりん山名集一盧思道一詭言といき  
て不字者使飲墨汁之斗とて東城集と  
前云詭語といふて純灰之斛の語ありと字  
いおのちりちりふ  
儉約 一字録の連綿篇一たも能階の家はとる  
秋迦れ子のおくともちり利子連歌のちり  
とありと一ちり地と建むと一いふと遊  
して儉約とよくとありむて謙退とよと古凡  
のち幸へかゝぬと我と今日のちりたとちり  
物と今日の時直とありし何と世代の和歌一  
そむく所唯あると一対るよと喜ちりて  
誠と録の二たると一言保論訣のちとて

山名集

四十五

町屋の春を通とちりくふさきしり

裏一頃 一巻の式同よる韻の裏一頃句も  
 第一句一頃句と階一頃句とあつり  
 とく小儀式の存よる花とまへへらむゆへ  
 花の作れぬあつりありまら花とらぬ  
 時と花の作と人よゆつる意やえれもま  
 とまらるるれんきとまらるるれんき  
 宗匠居間一巻の式同よる儀の文席一頃句  
 善海よる二句之間ちり一頃句  
 屏風上陰とらるる宗匠も連るる威儀一頃句  
 りとくおんの方一頃句と一頃句とあつり  
 當方の二頃一新古と論きと階一頃句とあつり

五條式

やまらあつらと養應の流分のとらるるあつり

- 一 諸れ停止
  - 一 小語僅あり
  - 一 歩合遠近
  - 一 一句一直
  - 一 月花一句
- ちり加式と増減して真字式の降同ありけり  
 の二條あり自句二連と一連と小連と衣の多あり  
 へきあり一方句と子句の片よかると十有初とあつり  
 一頃と十頃の差ありて一巻くよる韻の式せえれ  
 一巻と一巻とくま嫌の用控とあつり一頃と一頃とあつり

遠近とある但存、先と云ふ書あれと先後の行は  
結し時もある遠近のそとある一二月花の二條  
も四式の雪月花とあれと雪と云ふは、あはれも所は  
よもなりと云ふは、月花の句と云ふは、句のそと、  
辨も一もも花を決して、句ちる一、子向方の一  
を、と云ふは、月花の句、控も、句、偏らね、百約の、  
も、は、式、の、例、の、や、も、よ、方、に、よ、り、一、か、く、は、ね、不、直、の、  
時、も、あ、ん、ま、ね、と、も、二、花、の、は、ら、お、ね、む、ね、古、式、と、は、  
あり、一、く、一、卷、の、控、も、古、式、の、書、ち、り、も、ね、る、に、

傳田

平仙月 述稿秘説より青園の句評の下に祖存  
の遺訓とあけて、秋を子に、是月おの訓と、平仙

二花二月のそとありを訓の大略とむ、一、  
より、花、の、は、ら、み、す、約、の、配、り、一、二、花、之、月、の、控、  
あれ、と、大、く、と、二、花、二、月、も、あ、り、一、を、あ、ら、  
ま、え、ま、の、者、向、と、み、句、月、は、月、と、一、七、句、月、  
と、一、秋、と、は、ら、け、重、長、の、七、句、八、句、と、一、又、く、月、秋、  
と、ひ、れ、は、花、も、む、つ、一、く、花、お、の、秋、も、か、り、  
一、一、つ、ま、ま、子、は、者、向、と、表、一、雜、と、き、一、句、  
あり、り、一、と、秋、季、の、者、向、と、一、花、の、所、も、遠、  
り、れ、折、返、一、の、あ、ら、り、一、と、一、冬、の、月、も、一、ま、  
一、も、花、を、れ、も、美、の、お、よ、ん、ま、ら、一、一、月、お、  
の、者、向、の、脈、と、一、傳、折、返、一、の、七、句、同、と、一、例、の、  
一、平、仙、の、季、も、一、決、一、て、是、名、の、月、と、一、

かたがは

四十一

きくひ四式の後とくもかくくれちらん可持て  
一とれ我が家の音は式二月のやとて言  
うらんむと連音の式とくも五音の月  
と八あるとと名持の裏のせりなれんと  
宗祇と勅免あるとやをれの方例と  
時々の不用のはたもあらずやとせはれ  
たるながくついで述而不作の例もあ  
後君のはたとくもや他とにたの音は  
おのの感ならん年一とたれの方式も  
ありとあり御とて誤ちるとや  
大和凡躰 假名韻府の畧文にじうりうの假名  
はういふキキフへの差ふあれ一づの音韻也

うふ通ひうの音韻とづに通ふはて論とま  
たりしあやあやあうれいあつ。はむ。のとき  
い假名の殊文とふるやとて和音の書はあ  
かきけされ假名の音とやうとるあつ。あ  
はむ。とくもや字内の入ありはる。おれ  
ともあやとひけいも。とと。あ。は  
あ。ら。と。今。の。う。ら。表。せ。な。ら。ん。う。づ。用。は  
あ。る。一。或。と。異。い。見。れ。き。と。ら。い。或。を。一  
を。ぐ。と。ろ。の。か。キ。ク。と。は。五。此。音。う。て。キ。し。と  
横の音ちるうりこれと韻府の音あう  
漢語と通さるあうと音韻のはたの推量  
くらあう今も定家の假名はうと一むの

書あれども取らざるありあはれ柱へさすけおの  
 ぞくし浪土の字書とてふらんまきく勅との通  
 用あれの上は用ゆりたとのある中は用ゆり元  
 へのおも下は用ゆりやぶらむ満ちてかきけ  
 ころとまりやうららりとまり假名はたけ  
 の大より<sup>母</sup>とつうすもまる一とるし書は和詞  
 の本推して初子菴の秘行ちり  
 之書と繪本おとすおと醋唄の係の歌文ありれ  
 へ醜いとくみ歌ゆりやうららいとる子へ書いし  
 ころのふ直しく方便し異見と此之説とやほは  
 大道の妙用なるぞくし<sup>る</sup>雇ふあり<sup>る</sup>重しあり  
 片波若幸にあむとそくとをらよく急あり

例にまくの二節とてかきくのちん末世のほをに  
 ころりてを儒内と姓善好悪のゆ成りもゆら  
 自力他力の議論も万に例の二段とて自己  
 一方の脈とてゆら<sup>る</sup>まの抱きあへ力おとや和歌  
 もれ子もゆらのゆ成りもゆら<sup>る</sup>能者の二節  
 とて詩歌連字れ<sup>る</sup>ゆら<sup>る</sup>道と建立  
 のそとありしとて何と雇うて談笑と  
 何と笑うて過當とてく<sup>る</sup>も漢の武帝へ  
 百世のめ<sup>る</sup>る東方朝とあられあ<sup>る</sup>れ  
 と大名の知しひれ子の系譜とちあ<sup>る</sup>れ  
 としつふへ<sup>る</sup>や今の有力の権那ち<sup>る</sup>一  
 建之のゆ成りとて鞠や揚弓の九段一得と

もきく新書の誹語とくせし温厲も和の即ち  
酸の耳の隣の談美もす控く今又二節  
の要文と辯者の骨切り控くふへ  
大要文 拙者るん春秋の二對と十論一節の内訖  
といひ孔子の十論のこしく春秋の褒貶  
と用ふれし知我と罪我の會教とけけく  
いそくに世間の機嫌と定むい達たの禪と十論  
のこしく古来の儀式とけあくそ神の標御と  
二祖とけくしていそる心下の血脈とをさる  
い儒師の秘訣とて多し要とけ人の表裏とをさ  
とらんや畢竟一し對の意を親く神子の  
荏弱とこらとていそる心下の血脈とをさる

い恩愛のあやうとるこけけ十論も十一  
條の要文あれし論者と對と大の訣といひ  
評者と對と大要文といひ辯者と對と  
老學親切といふ一室の三子へ才之段あり  
變化撮 白馬教誡訓の變化とありんは  
こけけ一 虚しやあれん交とけけ撮とて  
變あれん虚とけけ撮とてけけ伊尹といひ  
比干といひ上在の要人と天理といひ管仲と  
はくふてけ撮とてれをけけ伍胥といひて撮  
とまふとてけ變通けけ方の用とありん  
けけい儒師の連綿もそけけ射の要と通  
てけけ式とてけけい

白馬教誡訓

伍伍



之界一音 先師の居れくの讀は是非段の難陳  
ありし段の氣は是ちなり時いふあとい非ちなり時  
うらうらとさうたはるるに儒師の孫とわくは善好  
一人の自教あるんしてはては讀の大界をよけ對と  
作者の善のうして好色の一段よりはれくは毎  
てけさ地とさるる一はねをも非のあくらちかぬ  
や道の教うしてさうたはるるやうに氣をたれ  
天下万民の耳目とさるるを大道の教たわ  
その教とくさうた人とさるるは是ちなり時  
さうた非ちなり時とさるるは一の指しは誤  
のい尼も入道して之界の通さなれと一音の  
さうたはるるに潜秘のほむむと談言微中の

賛よわらうにたわく儒師のぼよ遠とわくは  
そくうううそくまんとそくあはれは凡雅の罪人  
とてさるるにわくははれくのは師もさるるは  
さうたはるるに今論の論も儒師はあはれと  
う微言とやあはれに何なり凡雅のわとさるる  
儒師の大とわくはさるるやさくや道は家とわ  
たあると師也とい秘を現といさくは身買は  
うむいさるると儒師の談笑の汎諱はともを  
いんたの和とさるるはさるる論の過言過語  
とてさるると建ててさるる言法は時の權  
重とさるるに知言とさるるの意用とて  
能説とて格物のさるるに



片のりて言詠の文とさしむる時たは一解を才  
一の類回さく信而不能及と仰りて教誡の  
秘よりして詞の釘とておとせよと論詔の  
虚言自在ちりる有言曾游其の他とて  
さく及や篇章の断續とてふは或と一章二章と  
命とてくも世の諷諫とぬくさるる不あり或と  
之章四章とけりて子思の諷諭といふと  
不あり或と子思の衍文あり一段と二章あり  
不ありなれと古おの論とてふも陽詔も  
断續も文章の凡よりて春秋と夫子の筆格  
ありとや或と文章とも教誡とも一向とて起の  
ありがくも不ありとて六章と七章ありなれ

と和漢の行を達とて増のめり起ちんもいぬり  
はくは作字の廉字より篇章の次第と失る  
るはくは作字の用よりてけの不用とん夫子  
之文章可得而圖夫子之性與天道不可得而  
圖とてふもはるるやんとて一都の起終とい  
北二篇の断續といひ同向異名の要通とい科  
も十哲もあふ不あり論詔と孔子の自撰と  
決とて一とて孟子とておとせよとて他撰と  
いふもやちとて垂垂のふとぬありと一都の  
對向とて居るありとて論詔古義とて子思の  
我の儒家の抄ありと論詔とて子文とてより  
て孟子のりて子思道とていふとてや漢一戦国の

今より高めてい文章の優劣を遷遠にして其論  
いし其の有用をわいし儒者といふ孔子の書  
一この箇の眼力ありしより一やまや白馬の  
文教の文章と今日の世の文とあるはて教  
誡たる世の有用とてあるはて教人といふ  
るはと廣くは藤者といふと其の心あり  
其の心ありしとて其の知不足といふは  
小人の抱ふ心とていふは其の心のあり  
とていふは其の心とていふは其の心のあり  
自己とていふは其の心とていふは其の心のあり  
とていふは其の心とていふは其の心のあり  
とていふは其の心とていふは其の心のあり

とていふは孔子の周制とていふは其の心のあり  
言のふは其の心とていふは其の心のあり  
くらとの過ありて自撰とて改の心ありて孟子の  
韓氏とていふは其の心とていふは其の心のあり  
の似而非ちなりとていふは其の心のあり  
大いねれ孟の勝者と自他の撰論とていふは其の心のあり  
その一末世の儒書も其の心とていふは其の心のあり  
疑りて其の心とていふは其の心のあり  
の持来りて其の心とていふは其の心のあり  
子者のりて其の心とていふは其の心のあり  
とていふは其の心とていふは其の心のあり  
とていふは其の心とていふは其の心のあり

とありてその一書と云く古人と信を以て  
言説のやまといふるよまのいふなり我れおれ  
書といひて中比の儒師なるも古宗新宗の視所  
の書も歌書軍書の花とてくちの源氏にうた  
の十帖にいまお詔と云ふはあはれや源氏に  
いふ文うていふ源氏にうた花とあはれ下詔と  
も上詔とていふるも軍書とていふるも今や  
甲陽軍鑑のよまといふ高坂の軍評より信  
玄といふもいふて電お軍の記原もいふるや  
いふる天下の七雄といふるあはれや源氏に  
自在ある返まといふる一書と撰者のいふ  
と記原とありていふ論するは源氏と記原

とあるに新宗の御船といふ集はれし御  
いふるよまといふ撰者の源氏よりいふる  
源氏といふるもいふるよまといふる御船とい  
は一書二書といふるもいふるよまといふる  
二書といふるもいふるよまといふるよまとい  
遺集といふるもいふるよまといふるよまとい  
ひらりといふるもいふるよまといふるよまとい  
ふるよまといふる撰論と建之の遠をいふて道  
百世の良書といふるよまといふるよまといふる  
いふるよまといふる撰論といふるよまといふる  
木野の喩の書といふるよまといふるよまといふる  
いふるよまといふるよまといふるよまといふる

るよまといふる

よまといふる

儒佛の二教とむしむしくとと詠言の微中り  
そと諛笑の詔諫もまらぬ

于時享保己歳之月中院

# 書林

京寺町押小路橘屋

野田治兵衛

